

桜美林大学「リベラル・アーツ学群」の現状と課題

畑 山 浩 昭

1. はじめに

1991年の大学設置基準大綱化以降、桜美林大学はカリキュラム改革を継続的にを行いながら、学生が主体的に学べる環境を整えてきた。まず、1994年度の入学生からは、それまでの「一般教育・専門教育・外国語・保健体育」という授業科目区分から、「基礎学習・専攻学習・自由学習」という学習区分に改めた。これは、大学における主体は「教育・教授・教室」から「学習・学生・フィールド」に変わったことを意味した。この考え方にに基づき、個々の学生は基礎的な学習から専攻の学習に進み、さらに興味関心に基づき学部学科を超えて、また、教室から地域、海外へとフィールドを移しながら自由学習という枠組みで付加価値をつけていった。

主体的な学びの実現をさらに推進するために、2005年度からは学群制への移行を始めた。まず、2005年に総合文化学群を設置し、2006年にビジネス・マネジメント学群と健康福祉学群、そして2007年にはリベラル・アーツ学群を設置した。これにより、それまでの学部学科をすべて改組したことになる。また、2013年には総合文化学群を芸術文化学群として名称変更している。学群とは隣接領域を大きくまとめた科目群であり、学生は学修の基盤を構築するためのプログラムを修了した後、アカデミック・アドバイジングや履修モデルに基づきつつも、自分なりの学修を組み立てることができる制度である。拙論ではリベラル・アーツ学群のこれまでの歩みを振り返り、主な課題について考察する。

2. 大規模なカレッジの構築

本学のリベラル・アーツ学群の入学定員は950名である。学群全体では4000名程度の学生数となる。いわゆる米国型の Liberal Arts College や College of Arts and Sciences をモデルにしているので、学群＝カレッジと認識している。学群内には言語学、文学、哲学、倫理、歴史学、人類学、経済学、法学、社会学、心理学、数学、物理学、化学、生物学など、いわゆる伝統的なディシプリンとして確立されている分野だけではなく、情報科学、環境学、地域研究などのインターディシプリナリー・プログラムも複数置いている。これらの分野はそれぞれ科目群として体系的に配置され、科目ナンバリングによって、それぞれの科目のアイデンティティー、つまり、分野やレベル、授業の形態等がわかる形になっている。

学生達は入学後、「基盤教育院」という教育組織において、学群制で主体的に学ぶための基盤を構築する。言語によるコミュニケーションやコンピューティングの基礎基本を学ぶと同時に、リベラル・アーツ学群の特徴でもある人文科学系、社会科学系、自然科学系の基本的な科目を広く履修することが義務付けられている。これにより諸学問の「対象」と「方法」を広く学び、学術の基礎を身につけながら、徐々に自分の専攻を決めていくことになる。2年次後半には専攻を決定し、その分野の専門的な学びを進めていくことになるが、自分の興味や関心、得意、不得意等を考慮し、幅広い科目群の中から履修すべき科目を選択する。多様なカリキュラムで学びながら付加価値を得られることがリベラル・アーツ・カレッジの魅力であり、総合力である。

3. ディシプリンが基本

リベラル・アーツ学群の学びを学生や保護者、教員や職員が理解する際に、最も重要な概念はディシプリンである。本学教授の舘昭氏によると、ディシプリンとは「固有の対象と方法と自律性」を持っており、リベラル・アーツは「ディシプリンを持った専門科目」である。従って、「リベラル・アーツ専門の分野から幅広く諸ディシプリンを身につけさせる教育プログラム」を編成し、カリキュラム化できることになる。^① 例えば、物理学はその考察の対象と研究方法を有しているし、文学も対象と研究方法が整っている。特定の人材育成のために、物理学と文学の基礎をディシプリンに基づきカリキュラム化し、結果として文理融合的な発想や思考力を有する人材を育てることが可能になるのである。

アメリカの大学においても、ディシプリンとリベラル・アーツは重要な概念である。*Handbook of the Undergraduate Curriculum* によると、ディシプリンとは、ある現象について理解するために、ひとつの規則の体系や慣習、決まった方法に当てはめることを教えるものである。ある調査をする場合、まずはこのような体系に当てはめながら、その現象を確立された用語や定義や概念で分類することから始める。また、ディシプリンは、知識とは何か、知識を得るためにはどうしたらよいか、などを理解するための概念的枠組みを提供し、ディシプリンに基づく思考とは、様々な概念や定理、規範、原理などを、ひとつの論理的な構造に仕上げていくということである。^②

リベラル・アーツ学群を設置する際、教育組織としての学群とは別に、教員組織・研究組織としての「学系」を導入したのも、ディシプリンの考え方に基づくものであった。個々の教員はある特定の分野において、その対象と方法を修得し、研究を続けている人間の集団であり、これらの教員が研究成果を授業に還元する

ことによって、学生達は最新の物事の見方や考え方、現象のとらえ方等を修得していく。さらに、異なるディシプリンに接することで、考え方や認識の方法に幅が出て柔軟になり、日々経験する新しい現象についても、どのように対応すべきかの枠組みを自分なりに発見できるようになるのである。ディシプリンは、最終的には知的スキルの発達を促進する。

4. リベラル・アーツ学群の実際と課題

(1) 専攻の決定

リベラル・アーツ学群に入学してくる学生は、将来的な専攻を決めている場合と、決めていない場合がある。リベラル・アーツ学群では、専攻を決めないまま入学することを特に問題視していない。学生が基盤教育のプログラムを修了する頃から学群の専攻へとつなげるからである。米国の場合は少し異なる。特にアーツ・サイエンス系のカレッジの場合、特定の専攻に入ることも含めて入学許可を出す場合と、希望する専攻には入学できないが、大学全体としてなら入学許可を出すという場合がある。後者の場合、「ユニバーシティー・カレッジ」のような部門で新入生を受け入れ、ジェネラル・エデュケーションと呼ばれるリベラル・アーツの基礎科目を履修させながら専攻への進学を指導する方法をとっている。ひとつの課題としては、2年次においてもまだ専攻が決まらなかったり、専攻を変更したりする学生が出てくることである。入学時からのオリエンテーションや継続的なアカデミック・アドバイジングが重要な役割を果たすので、これらの機能を強化し学生の主体的な学びを支援しなければならない。

(2) 現代的テーマとインターディシプリン

伝統的なディシプリンは確固たる対象と方法を有し、安定感があるが、学生にとっては古臭く、現代的な諸問題に対して総合的に応えられない場合もある。例えば、国境を越えた環境問題やグローバル経済、貧困や人口問題など、国際的なアプローチ、グローバルな視点、インターディシプリナリーによるアプローチ等が必要になる。近年の学部学科の名称やプログラムの名称には、このようなテーマや課題を反映させるものが多く学生達の関心も高い。

しかし一方で、ディシプリンによる基礎学術の学修がおろそかになったり、現代的なテーマを前面に出すがあまり、ディシプリンが見えなくなったりして、結果的に、学生達が基本的な学術のスキルを身につけられないということも起こる。インターディシプリンという語の中には独立したディシプリンが複数乗り入れることによって複雑な現象や課題に取り組もうという意味合いがあるが、「学際的」とか「総合的」、「教養的」という語になると、それとしての単体性、全体性、独

立性が強調されるようになるので、個々のディシプリンの方法や応用が弱体化することになってしまう。これは基礎学術としてのディシプリンを基本とするリベラル・アーツ学群としては重要な課題である。

(3) アカデミック・デパートメントか学科か

アカデミック・デパートメントという概念の場合は、ディシプリンが基本となっており、科目の体系化によって構成される教育プログラムや担当教員も、デパートメントが中心となって決められる。しかしデパートメントには学生が所属することを前提としていない。一方、学科の場合は、教員も学生も所属し、最初からカリキュラムも組み入れてあるので、ディシプリンの上にプログラムが展開されているという感覚が薄くなってしまう。この相違をきちんと認識するために、本学では学系を置き、そこから学生が学修する教育プログラムの科目を担当する形をとった。

しかし、デパートメントと学科の本質的な区別を教員、学生、職員の全員が理解することがなかなか難しく、学科的な発想にどうしても戻ってしまう。特に、入学定員や収容定員、教育課程等の用語によって説明していくと、カレッジ、デパートメント、ディシプリン、カリキュラムという概念から離れていくのである。これは、リベラル・アーツ学群の教育研究を展開していくにあたり、大きな課題である。

5. 終わりに

本学の建学の理念にも、国際社会で活躍できる人材の育成を謳っているが、その線上に、社会の要請に応える教育研究でなければならないという声もある。いわゆる「学士力」や「社会人基礎力」の中には、思考力やコミュニケーションスキルだけではなく、態度や協調性、問題発見力や解決力、想像力や柔軟性などが含まれている。これらは、しかし、大学で学んだ結果として修得できる力であるとする、それを可能とする学士課程教育、カリキュラムはどうあるべきかという問いに変わる。リベラル・アーツによるディシプリンを基盤とした柔軟なカリキュラムや教育プログラムは、これらを実現するに十分な力を有している。変化が激しい現代社会において、リベラル・アーツ教育に関する継続的な研究と改革が必要である。

① 舘昭、「原点に立ち返っての大学改革」、東信堂、2006

② Gaff, Jerry G., James L. Ratcliff, *Handbook of the Undergraduate Curriculum*, Jossey-Bass, 1997